

## 慶野義雄先生のご退職にあたって

法学部長 石上 泰州

慶野義雄先生は、平成八年四月、平成国際大学の創設メンバーのお一人として、本学法学部に迎えられました。慶野先生は、大学の草創期を担われたファウンダーのお一人であり、また、二十余年にわたって大学を支え続けてこられた功労者であります。その慶野先生のご定年とはいえ、本学をご退職されるにあたりましては、残された法学部スタッフの一人として、支柱を失うがごときの喪失感を覚えざるをえません。

慶野先生は、昭和二十一年十二月にお生まれになり、京都大学法学部、同大学院に進まれた後、防衛医科大学校の専任講師にご着任されました。その後、同助教教授を経て、平成四年には大阪国際大学政経学部教授にご就任されましたが、平成八年、請われて、本学の開設と同時に、法学部教授としてご着任されました。爾来、慶野先生は、本学の研究・教育の中心的な担い手であられたのはもちろんのこと、産声をあげたばかりの大学を安定した軌道に乗せるための、大学運営の実務を担う要として、大学に多大の貢献をされてこられました。

先生は学内においては、教務部長の他、図書館長、自己評価委員長、総務委員長などの要職を務められましたが、近年は、社会・情報科学研究所の所長を長らく、そしてご定年までお務めいただきました。同研究所は本学法学部の研究拠点であり、その長は、研究者としての本学教員を内外に代表する存在であります。近年、社会・情報科学研究所の職は、まさに余人をもって代え難く、慶野先生の指定席の感がございました。

慶野先生の研究者としてのご足跡を云々するのは、先生の背中を遥か遠くから仰ぎ見る駆け出しの輩にとつては失礼の極みとは存じますが、伝統ある憲法学会において、本学名誉教授の高乗正臣先生の後を継がれ、現在もなおお理事長職をお務めでいらつしやることは、先生のご業績が広く学界において評価されていることの何よりの証左と申せるかと存じます。

また、先生が、いわゆる保守の立場から、現実の政治を客観的に分析されてこられましたことは、先生のご主著といえる『国民の政治学——保守主義の真髓』のタイトルにも示されている通りであります。先生が世に問われた数々の論文のタイトルをあらためて拝見させていただくにつけ、先生が世に阿ることなく、立ち位置を変えることなく、揺るぐことのない主張を続けてこられたことに、現実政治の研究に携わるもの一人として、敬服の念を抱かざるをえません。

同じ大学に籍をおかせていただくなかで、私にとりまして印象深いのは、大学冬の時代と呼ばれる昨今、とかく学生を集め、大学を存続させることこそが至上命題であるかのような空気が蔓延するなか、慶野先生が、温厚で優しい語り口ながらも、大学本来のあるべき姿を語り、大学の原点を論じ、これらを疎かにする風潮に対して、静かに、そして強く警鐘をならし続けられたことです。これは、大学にとつての旧き良き時代を懐古してのご発言などでは決してなく、今日の大学をとりまく厳しい環境を十二分に把握、理解されたうえで、そうした時代であるからこそ、大学の本来のあり方を忘れてはならない、原点を疎かにして軽佻浮薄に時代へ追従すれば、結局は時代の荒波に流されかねない、ということをお論じくださったのではないかと思われます。

大学とはいかにあるべきか、研究者とはいかにあるべきかを後進にお示しくくださった慶野先生が本学を去られますことには、憂慮と不安を覚えざるをえませんが、しばしば先生が口にされた、「研究の裏付けあつての教育」という

お言葉をあらためて肝に銘じつつ、微力を捧げて参りたいと存じます。

本学への多大なるご貢献にあらためて深謝申し上げますとともに、ご退職後の益々のご研究の発展とご健康を心よりお祈り申し上げます。